

こがもクラブ特別プログラム 「自然と遊ぼう! 9」を終えて

心理学部 心理学科 薦田 未央

去る10月24日(日)に、京都御苑「母と子の森」にて心理学部・心理学研究科・心理臨床センター共催の本プログラムが開催されました。この日は、天候が心配されながらの開催で、午後1時半から開会の挨拶を行っている最中にポツリポツリと雨が降り始め、小雨の中、森を散策することになりました。小さなお子さんも沢山参加してくださいましたので体調を気遣いながらの決行ではありましたが、そのような心配もよそに、元気いっぱい駆け回って楽しんでおられる姿が見られました。今回は29家族84名(0歳から12歳までのお子さん49名)にご参加いただきました。また、学生ボランティアには学部1年次生から大学院生や研究生までの20名が参加、そして教員5名という構成でした。

これまで、京都御苑「母と子の森」での活動は春・秋合わせて3回実施しましたが、今回はいくつかのポイントを企画に盛り込みました。1つは、「観る」「聴く」「探す」「創る」という観点から、子どもたちや保護者が自然の中での気づきや面白さを体験できるようなプログラムを提供すること、2つ目は学生がより自主的にご家族や子どもたちに関われるようなプログラムの流れにすることでした。プログラムの内容は、理科教育専門の菅井啓之教授や図画工作科教育専門の藤本陽三准教授をはじめスタッフが構成を練り、準備しました。まず、スタート地点から地面をよく見て葉っぱや木の実を拾ったり、キノコを探しながら広場へ移動しました。この時期の森には驚くほど多種多様なキノコが生えていて宝探し



のように楽しむことができ、熱中するあまりにコースアウトするグループもありました。次のポイントでは、森の中の「音」を聴くことを

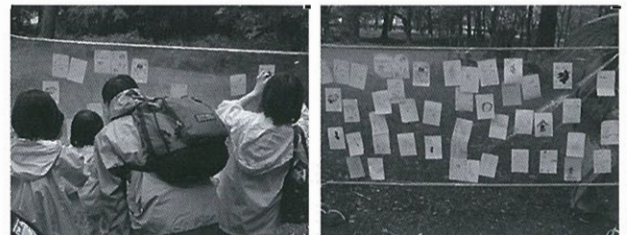
試みました。はじめは騒がしくて、よくわからないという様子もありましたが、小学生のお子さんがじっと耳を澄ませて聴き入る姿やそれを文字や絵に表現する姿を見て、小さいお子さんもまねて絵を描いたりしていました。聴き拾った音は、森の中に用意されたキャンパスに展示されましたが、車の音、鳥の声、人の声、風の音など子どもの感性豊かな一面が見てとれて面白い形になりました。また、草むらでの虫とりにも熱中し、大きなクサキリやクツワムシを沢山捕まえ、虫かごに入れて観察しました。シンジュ(神樹)のタネを飛ばしてらせんを描きながら落ちる様子を観察したり、同じようにひらひら飛ぶ紙片を飛ばしてみたりもしました。最後には、集めた葉っぱと交換でお弁当箱やトントン相撲の工作キットを受け取り、枯れ葉に目玉や足をつけたものを虫に見立てて相撲を取らせたり、拾った木の実や葉っぱでお弁当を作って遊びました。もちろん集められた葉っぱも造形に活用されてきれいな模様となりました。

このような活動の流れには、学生の力も大きな役割を果たしていました。2、3家族に2人



ダンボール箱の土俵でトントン相撲

の学生がつき学生自らがリードして子どもたちと活動をする構成でしたが、事前の説明などでプログラムのポイントを心得ておいた学生の自主性に委ねた動きが「熱中」する活動につながったのかもしれない。参加者の方からは「次はいつありますか?」という声もきかれ、子どもも大人も楽しんでいただけたようでした。今回は、雨模様の森の姿からまた一層、自然の面白さを学びましたが、それ以上に子どもさんの感性の豊かさやパワーに驚き、学生にとっても貴重な学びの時間になったことを実感しています。今後も、ひき続き学生の学びの場、地域のご家族との交流の場となるようなプログラムの充実に努めたいと思います。



森の中の音を表現したキャンパス